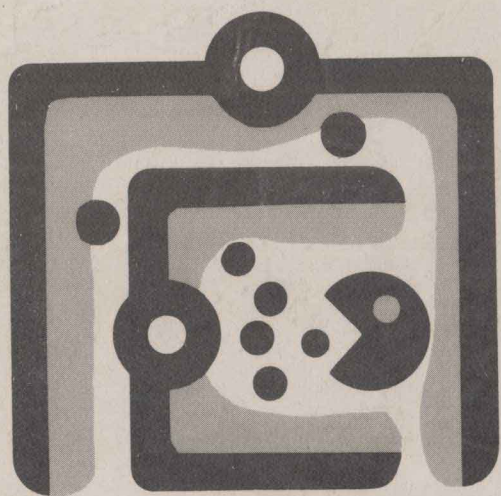


ことばの科学

STUDIA LINGUISTICA

第11号



名古屋大学言語文化部
言語文化研究会
1998年12月

ことばの科学

STUDIA LINGUISTICA

第11号

1998年12月15日 印刷

1998年12月20日 発行

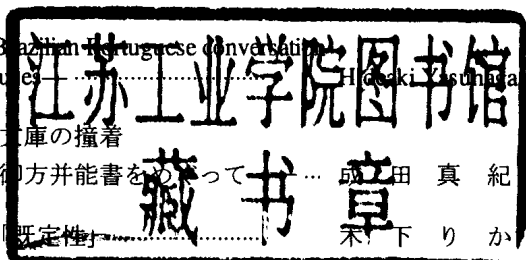
編集兼 名古屋大学言語文化部

発行者 言語文化研究会

印刷者 名古屋大学生協 印刷部

目 次

分裂能格の諸相(1)	近 藤 健 二	5
「成立」と「存在」 ——「融合」に関する覚書——	小 坂 光 一	33
「移民」思想の潮流<後篇>	田 川 真 理 子	51
仮定条件を表す「トキハ」の成立条件について ——「一タラ」「ト」との比較を通して——	小 野 純 一	79
否定構文に現れる副詞とモダリティ	杉 村 泰	93
Positioning of adverbial clauses in Brazilian Portuguese conversation ——focusing on <i>se</i> and <i>quando</i> clauses——	Hirotaki Sunahara	111
津軽医事文化史料集成と池田家文庫の撞着 ——洪江道純直筆の一粒金丹御方并能書をめぐって——	成 田 真 紀	147
「真偽判断」を表わす文末形式と「既定性」	木 下 り か	171
「ことば」という共同性の根拠 ——日系アメリカ人とチカペラの記述から——	井 村 俊 義	183
日本語格助詞「が」の獲得について ——Y児のデータ分析——	西 部 真 由 美	201
談話における「んだから」の使用条件と機能	許 夏 玲	225
日本語研究における「モダリティ」論の問題点 ——モダリティは「主観的」な意味要素か——	鈴 木 智 美	243
「～ところを～する」という構文の意味記述	加 藤 理 恵	257
障害者文学研究序説 ——日本と中国を中心に——	黄 利 恵 子	269
タイ語母語話者の鼻音化母音の特徴 ——日本語母語話者と比較して——	勅使河原三保子	291



はしがき

『ことばの科学』第11号をお届けする。昨年度刊行した10号のはしがきに、この号を節目に『ことばの科学』が変貌をとげる兆しが見えてきたことをほのめかした。実はそれは言語文化部を母体とした大学院国際言語文化研究科の設置のことだったのである。

日本言語文化専攻と国際多元文化専攻の2専攻で構成されるこの大学院は我々の希望通り、今年(1998年)の4月に設置された。学生が増えただけでなく、言語文化部を母体とする教官が担当する大学院、専攻、講座の数もうんと増えたことになる。日本言語文化専攻5講座、国際多元文化専攻5講座(以上は国際言語文化研究科)、国際コミュニケーション専攻5講座(国際開発研究科)それに社会情報学専攻言語情報論講座(人間情報学研究科)である。講座数で言うならば16にものぼる。

しかし、数だけで満足しているわけにはいかない。今後これらの専攻・講座がどのように連携プレイをしていくか、将来どのようにまとめるか、など課題は多い。しかし、何よりも大事なのは学生の指導である。この『ことばの科学』も微力ながら多少なりとも学生の指導に貢献していきたいと思う。

国際言語文化研究科の設置に伴い、委員会の統合・廃止・見直しが行われた。「言語文化研究委員会」は消えたが、『ことばの科学』の発行は続けることにする。相変わらずDTP(Desktop Publishing)という手段ではあるが。

この11号には15篇の論文が掲載されている。300ページを越える分厚いものとなった。分量の点から言えば今までの最高である。執筆者の紹介は次ページに回した。

今年は国際言語文化研究科日本言語文化専攻に費用の全部を援助していただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。

(小坂 記)

1998年12月

執筆者一覧 (掲載順)

近 藤 健 二	言語文化部・大学院国際言語文化研究科教官
小 坂 光 一	言語文化部・大学院国際言語文化研究科教官
田 川 真 理 子	文学研究科日本言語文化専攻大学院生
小 野 純 一	文学研究科日本言語文化専攻大学院生
杉 村 泰	文学研究科日本言語文化専攻大学院生
Hideaki Yasunaga	国際開発研究科国際コミュニケーション専攻大学院生
成 田 真 紀	文学研究科日本言語文化専攻大学院生
木 下 り か	文学研究科日本言語文化専攻大学院生
井 村 俊 義	国際言語文化研究科日本言語文化専攻大学院生
西 部 真 由 美	文学研究科日本言語文化専攻大学院生
許 夏 玲	文学研究科日本言語文化専攻大学院生
鈴 木 智 美	文学研究科日本言語文化専攻大学院生
加 藤 理 恵	文学研究科日本言語文化専攻大学院生
黄 利 恵 子	国際言語文化研究科国際多元文化専攻大学院生
勅使河原三保子	国際開発研究科国際コミュニケーション専攻大学院生

『ことばの科学』執筆要項及び第1号～第10号の内容(目次)
に関しては次のURLをご覧ください。

<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~kosakak/genko>

分裂能格の諸相(1)

近 藤 健 二

能格言語には能格と呼ばれる格がある。能格は他動詞文主語としての特別の形態であるが、他動詞文主語のすべてが能格によって表されるわけではない。この稿では、他動詞文主語が同一言語内で能格になったり能格以外のものになったりする現象、すなわち一般に分裂能格 *split ergative* と言われる現象を、まず視点と焦点という観点から、次に現在の叙述と過去の叙述の非対称という観点から考察する。そして後の稿において、同じ現象を、人称代名詞における人称の違いと動詞における意味の違いに注目しながら論じる予定である。なお、本稿では用例の語注に以下の略語・略号を用いる。

ABL	奪格	IND	直接法	R	再帰形
ABS	絶対格	INS	具格	REL	関係格
ANTI	逆受動	O	目的語	S	主語
AOR	アオリスト	PAST	過去	sg	単数
DAT	与格	pl	複数	TF	時制形成辞
ERG	能格	PRES	現在	1	1人称
FUT	未来	PREV	動詞接頭辞	2	2人称
HTR	半他動詞	PURP	目的	3	3人称

1. 視点と焦点

能格言語の文法を説くのに、逆受動 *antipassive*(あるいは反受動、逆受身)と呼ばれる構文がよく引き合いに出される。この構文は能格構文に対立する自動詞文であり、能格構文で能格によって表される要素がそこでは絶対格によって表され、能格構文で絶対格によって表される要素が具格や奪格などによって表される。下に、ワルング語 *warrungu* (オーストラリアのクィーンズランド州北部で話される原住民語)

における能格構文と逆受動構文の例を角田(1986)に従って挙げてみよう。

- (1) a. pama-ngku kamu-φ pitya-n
男-ERG 水-Abs 飲む-PAST/PRES
「水を男が飲んだ／飲む」
- b. pama-φ kamu-ngku pitya-kali-n
男-Abs 水-INS 飲む-ANTI-PAST/PRES
「男が水を飲んだ／飲む」

上の(1a)は「能格＋絶対格＋動詞」という形態を有する能格構文であり、(1b)は「絶対格＋具格＋動詞」という形態を有する逆受動構文である。なお、本稿では逆受動構文を絶対格主語構文、略して絶対格構文と呼ぶことにするが、絶対格構文のすべてが逆受動構文と呼ぶものに該当するわけではないことを断っておく。

さて、能格構文と絶対格構文が対立するのはワルング語に限られた現象ではない。それは、能格言語に特徴的な現象である。次の(2)はエスキモー語の例であるが、ここでも一見同じように思われる意味が異なる構文によって表されている。

- (2) a. arna-m neqa-φ ner-aa
女-REL,sg 魚-Abs,sg 食べる-IND,3sg(O), 3sg(S)
「魚を女が食べている」
- b. arnaq-φ neq-mek ner'-uq
女-Abs,sg 魚-ABL,sg 食べる-IND,3sg(S)
「女が魚を食べている」

上の(2a)では他動詞文主語の arna-m が関係格となっているが、この関係格というのは能格に相当する格である。したがって、(2a)は能格構文であると言ってかまわない。一方(2b)は、宮岡(1986)流に言えば、関係格が絶対格に「昇格」し、絶対格が奪格に「降格」した逆受動構文、つまり絶対格構文である。なお、この構文が自動詞文であることは(2)を(3)と比較することによって明らかとなる。

- (3) a. arna-t neq-mek ner-aat
女-REL,pl 魚-Abs,sg 食べる-IND,3sg(o), 3pl(S)
「魚を女が食べている」

- b. arna-m neqe-t ner-ai
 女-REL,sg 魚-ABS,pl 食べる-IND,3pl(O),3sg(S)
 「魚を女が食べている」
- c. arnaq-φ neq-nek ner'-uq
 女-ABS,sg 魚-ABL,pl 食べる-IND,3sg(S)
 「女が魚を食べている」

エスキモー語の他動詞文では、主語と目的語の人称・数が動詞の接辞として投影される。(2a)では主語も目的語も3人称単数であり接辞が -aa, すなわち「-a(直接法他動詞)+a(3人称単数目的語)+φ(3人称単数主語)」となっているのに対し、(3a)では主語が3人称複数、目的語が3人称単数であるので接辞が -aat, すなわち「-a(直接法他動詞)+a(3人称単数目的語)+t(3人称複数主語)」となっている。また(3b)では、主語が3人称単数、目的語が3人称複数であるので接辞が -ai, すなわち「-a(直接法他動詞)+i(3人称複数目的語)+φ(3人称単数主語)」となっている。ところが(3c)では、(2b)の3人称単数名詞 neq-mekが3人称複数名詞のneq-nekに変わっても接辞は自動詞に特有な -uq のままである。要するに、(2b)のneq-mekも(3c)のneq-nekも動詞接辞として投影されないので、少なくとも統語的には目的語ではなく副詞的要素と見なされるのである。¹

¹ エスキモー語で「魚を食べる」と言うのに「魚を」の部分で表すのは、魚のすべてではなく魚の一部を食べるからであろう。その本来の意味は、「魚から(その一部を)食べる」であったと考えられる。奪格のこのような使い方は、印欧語に属する多くの言語でいわゆる部分属格が動詞の目的語になるのと本質的に同じ用法である。また、たとえばラテン語で *domine, memento mei* (Jesus, remember me) <Vulgate, Luke 23.42> と言うときの属格の用法も元来は「イエスよ、私のことを思い出し給え」という意味の部分属格であり、英語でも *drink of* という古めかしい表現における *of* はもちろん、*think of*, *speak of* などの *of* もその歴史を溯れば部分属格にたどり着く。ところで、日本語の東北方言では「こと」または「ごと」という形態が一種の目的語マーカーとして機能するようだが、この「こと」「ごと」は「のこと」「のごと」の省略形であり、ヨーロッパ語の部分属格を、さらにはエスキモー語の絶対格構文における奪格の用法を彷彿とさせる。

一方ワルング語の絶対格構文では、(1b)のように目的語に相当する要素が一般に具格によって表されるが(ただし、与格によって表される場合、あるいは与格によってしか表されない場合もある)、これは「水を飲む」ことを「水で飲む」「水で飲むことをする」のように、また「魚を食べる」ことを「魚で食する」「魚で食べることをする」のように認識したことによる結果であると思われる。

なお、印欧語では対格が方向を表す副詞的なものから生まれたと言われており、これはグルジア語 Georgian などの絶対格構文における与格目的語の本来の用法、つまり「水に飲むことをする」「魚に対して食べることをする」のような表現法に類するものであったと考えられる。他動詞

エスキモー語に、他動詞文としての能格構文と自動詞文としての絶対格構文が存在することは分かった。そこで問題は、ふたつの構文が意味的にどう異なっているかである。この点に関する典型的な説明は、能格構文の絶対格名詞は定 definite のものを表し、絶対格構文の奪格名詞は不定 indefinite のものを表す、というものであった。少なくともエスキモー語については、このように説かれてきた。実際、宮岡(1978:155-156)は絶対格と定、奪格と不定とを明確に結びつけることによってエスキモー語の能格構文と絶対格構文の違いを説明している。しかし宮岡(1986:107-108)では、その主張を大幅に変えている。すなわち、「古い伝統をもつグリーンランド・エスキモー語文法の慣わしでは、能格構文の絶対格名詞は定冠詞をつけて訳され、たしかにその妥当な場合もしばしばある」と述べながらも、「所有者が明示されていたり、(方言によると)固有名詞であったり、あるいはコンテキストからして、定と不定の対立でいえば、不定とはみがたいような名詞項が、一方では能格構文で絶対格をとり、他方では反受動構文で奪格をとってあらわれうる」として以下の例を挙げている。

- (4) a. qalta-n ikuve-llru-a
 桶-ABS,3Rsg,sg こぼす-PAST-IND,3sg(O),3sg(S)
 「彼は(じぶんの)桶をこぼした(故意に)」
- b. qalta-minek kuv'-i-llru-uq
 桶-ABL,3Rsg,sg こぼす-E-PAST-IND,3sg(S)
 「彼は(じぶんの)桶をこぼした(誤って)」
- (5) pupsu-keng-uq ulluva-mnek
 つねる-HTR-IND,1sg(S) 頬-ABL,1sg,sg
 「私は(じぶんの)頬をつねってしまった(誤って)」

(4a)の能格構文で絶対格名詞が「じぶんの桶」という特定のもを表すことには何らの問題もないが、(4b)の絶対格構文で同じ「じぶんの桶」が奪格で表されたり、(5)の絶対格構文でも特定のものである「じぶんの頬」が奪格で表されたりするのは、「絶対格は定」「奪格は不定」という定式化の障害になるというわけである。

こうして宮岡(1986:109)は、「……格のヒエラルキーと変転のなかで格のしめる

目的語の歴史を遡ると、その果てに副詞的なものが見えてくるというのは非常に興味深いことである。

位置を考えていくなれば、ある名詞項を絶対格にすえるということは、もっとも強い話者の関心という焦点(スポット)をそれにあてるとのことではないか」と言う。さらに(4)や(5)のような現象について、「逆に絶対格の被動者が奪格に降格されるということは、そこにあてられる焦点が弱まり、不定の含みをにうことになったり、あるいは……焦点が奪格名詞によりむしろ、動詞のあらゆる動作・過程にむけられ、それが強調されていくことではないか」と述べている。

宮岡の説明は不鮮明である。宮岡が言う「もっとも強い話者の関心という焦点」という記述からも、「焦点が奪格名詞によりむしろ、動詞のあらゆる動作・過程にむけられ、それが強調されていく」という記述からも、焦点が正確に何であるのか分からない。ところで、亀井孝ほか編著『言語学大辞典』第6巻も焦点という述語を以下のように説明したうえで、エスキモー語の能格構文と絶対格構文の使い分けに焦点の移動が関与していると述べている。

焦点を当てるということは、いわば心眼に現われる表象群の中から真正面に現われる表象に心の焦点を向けることである。そのような表象を“正に(recto)”表象されたものとし、それに関連しながら焦点の中に入らない諸々の表象は“斜めに(obliquo)”表象されていると考えることができる。そして、正に表象されたものは、限定された表象である。このように、心眼の表象の正・斜を表現に反映させる言語があっても不思議ではない。(722頁)

さらに『言語学大辞典』第6巻は、「統語論」の項において、エスキモー語における両構文の差異をより具体的に次のように説明している。

エスキモー語でさらに面白いことは、目的語が絶対格ばかりでなく、奪格(ablative)によっても表されることである。たとえば、Arnaq neqmek ner'uq「女が魚を食べている」は、日本語の訳だけみると、上掲の Arnam neqa neraa.と同じになってしまうが、arnaq は絶対格、neqmek は奪格で、動詞 ner'uq は自動詞形であって、arnam が関係格、neqa が絶対格、そして、neraa は「彼(女)がそれを食う」という他動詞形であるのとは、文法的に大いに違う。意味も、neqa「魚」が定(既知)であるのに対し、neqmek は不定(未知)であるという……一方、Arnaq neqmek ner'uq.の方は、絶対格の arnaq が主語を示すが、あるいは、このエスキモー語の文はむしろ「女は魚を食べている」と訳すべきなのかもしれない。いずれにせよ、文法的にいえば、neqaの方は他動詞の直接補語であるのに対し、neqmekの方は自動詞の間接補語ということになろう。さらにいえば、話者の心眼からすると、目的語の方に焦点(focus)が合わせられるときは neqaを、目的語が心眼からやや遠く斜めに表象されるときは neqmek を用い、nere-「食べる」も自動詞として扱われることになる、といえるかもしれない。(999-1000頁)

焦点の概念を正確に把握するために、ここで、中国語の他動詞文を引き合いに出

してみよう。中国語の他動詞文には、基本的なSVO構文と‘把’を用いたSOV構文と‘由’を用いた能格構文とがある。そしてこれらの使い分けは、次に示すように、焦点の移動がかかわっている。

- (6) a. 我买书了。(私は本を買った。)
- b. 我把买书了。(本を私は買った。)
- c. 书是由我买的。(本は私が買った。)

(6a)では、全体が新情報を表す場合を除けば、‘买书(本を買った)’あるいは‘书(本)’の部分が焦点である。(6b)では、‘把书(本を)’の部分が焦点となる特別の場合を除けば、‘买了(買った)’の部分が焦点である。(6c)では、‘由我买的(私が買った)’の部分が焦点となっている。以上のことは、近藤(1998)で述べたことであるが、問題は焦点という概念の捉え方、というよりも焦点という述語の使用法が『言語学大辞典』のそれとは異なっているということである。

焦点という語は、上の中国語に関する説明では、発話において「もっとも重要な情報を表す要素」、すなわちディック Dik(1978:18)が“the Focus represents what is relatively the most important or salient information in the given setting”と定義しているのと同じ意味で用いられている。これは談話文法や機能文法などで一般化している用い方である。一方、『言語学大辞典』の言う焦点は明らかに、そして宮岡の言う焦点もおそらく、オーストロネシア言語学で採用されている焦点と同質のものであり、それが表す概念は「もっとも重要な情報を表す要素」ではない。誤解を恐れずに簡単に言うと、それは発話に際して「真っ先に注意が向けられる要素」のこと、そして一般に「文頭か文頭近くを占める要素」のこと、さらに言えば「トピックと重なり合う部分が大きい概念」のことである。そこで本稿では、両者をはっきりと区別するために、この「真っ先に注意が向けられる要素」を視点 viewpointと呼ぶことにする。²

²オーストロネシア語族に属する多くの言語に、焦点、すなわち本稿で言う視点、を明示的に表すための特別のマーカーがある。それは、たとえばトンガ語 Tongan では ko, サモア語 Samoan では 'o という形態である。視点化されうる要素、すなわち視点であることを明示するマーカーが付きうる要素は、行為者、行為の対象、行為の受益者、場所、道具である。視点化された要素はマーカーを伴って文頭に置かれるのが通例であるが、タガログ語では文頭に動詞が置かれる。ただしタガログ語では、動詞と視点要素とが常に呼応し合い、どの要素が視点であることを示す接辞が動詞に必ず付される。つまり、トンガ語やサモア語などとは違って、行為者か行為の対象か行為の受益者か場所か道具のいずれかを視点化することが義務的となっているのである。

ところで、視点はトピックとよく似たところがある。そのために、視点を標示するマーカーは

さて、視点も焦点も能格構文と絶対格構文の違いを知るうえで不可欠な概念である。視点というのは、喩えて言えば、カメラで何かを写そうとする場合の何か、つまりカメラが向けられる対象である。これに対して焦点というのは、シャッターチャンスをつねらってシャッターを切る瞬間における被写体の姿である。それは赤ん坊が笑っているさまであったり、選手がボールを打とうとしている姿勢であったり、水平線に沈もうとしている太陽の光景であったりする。

カメラを向けシャッターを切るという2段階の行為の前段階、すなわちカメラを向けるという行為と視点との類似性についてもう少し考えてみよう。人はカメラを手にして何を写そうとするか。当然、関心のあるものにカメラを向けるであろう。子供の好きな人は子供を、猫の好きな人は猫を、それも特に自分の子供、自分が飼っている猫を写そうとする。これと同様に、発話においても発話者にとって当面の関心事であるものに視点が置かれる。一般に人間、特に行為者を視点とする傾向が強いと言えそうである。しかし話者の注意がたとえば行為の対象に対して真っ先に向けられることもある。犬が猫を追いかけているのを見て、犬の飼い主は「犬が猫を追いかけている」と認識しようが、猫の飼い主はおそらく「猫が犬に追いかけている」と認識するであろう。このような認識の差、そしてそれに付随する言語表現の差は、話者が「真っ先に注意を向ける対象」、つまり視点の置き所が異なるために生じる差にほかならない。

上の説明で視点という概念が能動構文と受動構文の違いに大きく関与していることが知られよう。しかし視点というのは、それ以外の面でも言語表現上の差異を生む要因となっている。たとえば、上の(6)に示した中国語他動詞文の使い分けは明らかに焦点の移動がかかわっているけれども、このことは次のように視点の移動もそれにかかわっていることを意味している。まず(6a)について言えば、それは行為者を視点とした表現、つまり「我(私)」についての叙述であろう。次の(6b)は行為者よりも行為の対象である「書(本)」を視点とした表現であり、「把」は行為の対象を視点とするためのマーカーとなっている。そして(6c)は明らかに行為の対象を視点とした、「書(本)」についての叙述である。なお、(6b)と(6c)とでは同じ「書

トピック化、すなわち話題化 topicalization のための装置であると言われる。しかし、不思議なことに、視点は焦点と呼ばれトピックあるいは話題と呼ばれることは少ない。いずれにせよ、視点はトピックと同一ではない。したがって、視点マーカーはトピック化のための装置、つまりトピックマーカーではない。このことは、日本語の「～は」ではなく「～が」に相当する要素、そして「誰」「どこ」のような疑問詞でさえ視点化されうるという事実からしても明らかである。

(本)’が視点となっているが、(6c)ではそれがトピック化されている。

視点と焦点とが一体の関係にあること、あるいは裏表の関係にあることは、「カメラを向け、シャッターを切る」という喩えから容易に理解されようが、またその概念が定・不定という概念と深くかかわることを指摘しておきたい。近藤(1998)で述べたように、中国語の‘把’を用いたSOV構文では目的語が特定のものを表すと説明されるのが通例であり、SOVとSVOというふたつの構文は目的語のまさに定・不定によって使い分けられるというのが従来の有力な説明であった。近藤(1998)ではそのような考えを否定したが、ここでそれを再評価しようとするわけではない。そうではなく、SOV構文では何ゆえに目的語が特定のものとなりやすく、SVO構文では何ゆえに目的語が不特定のものとなりやすいかを、視点という観点から述べておきたいのである。

いま、「太郎がリンゴを食べている」場面を思い描いて、リンゴの定・不定によって視点がどう変化するかを考えてみよう。仮にリンゴが不特定のものであるとする。その場合には、話者の注意がリンゴに対して真っ先に向けられる可能性は小さい。たとえリンゴが太郎にとって大嫌いな食べ物であり、太郎がリンゴを食べているのが意外なことであっても、太郎よりもリンゴの方が先に話者の注目をひくことはあるまい。実際、太郎に注目してはじめて彼がリンゴを食べていることが意外に感じられるのである。したがってリンゴが不特定のものの場合、行為者の太郎を視点として(7a)のような文が発せられるであろう。逆にリンゴが特定のものの、たとえば話者が食べようとしてテーブルの上に載せておいたものだとする。その場合には、話者の注意は真っ先にリンゴに対して向けられよう。その結果、視点としての目的語が前方に押し出され、(7b)のような文が発せられる可能性が大きくなる。

(7) a. 太郎、リンゴを食べている。

b. リンゴ、太郎が食べている。

以上のように特定のものは視点になりえても不特定のものは視点になりにくく、したがって、視点として機能する中国語の‘把’目的語は一般に特定のものを表すというわけである。しかしここでも強調しておきたいが、‘把’目的語が不特定のものを表すこともありえるし、特定のものが‘把’目的語にならないことはごく普通に起こりえるので、目的語の定・不定が中国語におけるSOV構文とSVO構文の使い分けを決定している要因であるとは断じて言えない。このことは、受動構文

の主語として不特定のものを仕立てにくいからといって、主語の定・不定が能格構文と受動構文の使い分けを決定していると言えないのとほとんど同じことである。

さて、中国語の他動詞文の使い分けを決定しているのと同種の要因、すなわち視点と焦点が、能格言語における能格構文と絶対格構文の使い分けにもあずかっている。このことを本節のはじめに挙げた(2)のエスキモー語の例に戻って考えてみよう。まず(2a)の能格構文について言うと、行為の対象が視点である。焦点は、行為者、または行為、または行為者と行為である。つまり、視点としての要素以外は一応何でも焦点になりうる。しかし、行為者に焦点を置くのが一般的なようである。なお、(2a)は、文脈によっては「魚は女が食べている」「魚を女は食べている」などと訳すのがよい。しかしもう少し口語風に訳すと、「その魚さ、女の人食べてるよ」「その魚さ、女の人は食べてるよ」といった具合になる。

次に(2b)の絶対格構文について言うと、ここでは行為者が視点である。焦点は、行為の対象、または行為、または行為と行為の対象であり、この場合にも視点としての要素、すなわち行為者以外は一応何でも焦点になりうる。なお(2b)は、文脈次第では、「女が魚を食べている」と訳すよりも「女は魚を食べている」とする方がよい。しかしこれももっと分かりやすく、「その女の人さ、魚を食べてるよ」と訳すことができる。

このように能格構文では行為の対象を「その魚さ～」といったふうに取りあげ、それについての叙述を展開する。また絶対格構文では、行為者を「その女の人さ～」のように取りあげ、それについての叙述を展開する。もちろん、このような説明がすべての能格言語におけるすべての能格構文と絶対格構文について杓子定規に成り立つわけではない。しかし、一部の能格言語においてであれ、能格構文はなぜ行為の対象を視点とする表現になり、絶対格構文はなぜ行為者を視点とする表現になったのか。Plank(1979:15)は、能格構文におけるトピック要素と対格構文(本稿で言う絶対格構文)におけるトピック要素とが異なるという観点から、“the accusative construction originates from the basic topicalization of the agent role in transitive clauses, and the ergative construction from basic patient-topicalization”と述べているが、この説明は単に、「AはBであるから、Bに由来するものである」と言っているようなものである。能格構文と絶対格構文の機能分化をもたらした根本的要因を理解するには、以下のような歴史的説明が必要である。

近藤(1996)で触れたように、言語の原初的段階においては、他動詞文は存在せず、

次のような自動詞文だけが存在したと推定される。

- (8) a. 父と母、開いた。(行為者+行為)
- b. 扉、開いた。(行為の対象+行為)

このような2項から成る自動詞文は、2つの仕方で3項から成る構文に発達したと考えられる。ひとつには、(8a)の型の文に別の要素が加わって(9a)のような表現が生まれた。これは絶対格構文になった。もうひとつには、(8b)の型の文に具格的要素が加わって、(9b)のような表現が生まれた。これは、(9a)との類推を通じて、能格構文として異分析された。なお、能格構文では行為者が、絶対格構文である逆受動構文では行為の対象がしばしば表されないが、このことはそれらが後から加わった要素、おそらく本来は副詞的な要素であったことと無関係ではあるまい。

- (9) a. 父と母、扉、開いた。(行為者+行為の対象+行為)
- b. 父と母とで、扉、開いた。(行為者+行為の対象+行為)

さて問題は、(8)と(9)においてどの要素が視点となっているかである。まず(8a)は「父と母」についての叙述であるから、視点は行為者であると見なさなければならない。また(8b)は「扉」についての叙述であるから、視点は行為の対象であると見なさなければならない。次に(9a)は(8a)を引き継いだものであるから、そこでは行為者が視点となる。そして(9b)は(8b)を引き継いだものであるから、そこでは行為者が視点となる。こうして、能格構文では行為の対象が視点となり、絶対格構文では行為者が視点となることに歴史的必然性が認められるのである。

ところで、能格構文と絶対格構文の違いを、前者が行為の対象を視点とした叙述であり後者が行為者を視点とした叙述であると説明するだけでは不十分である。なぜなら、先の(4)と(5)に示された現象、すなわち能格構文が意図的行為を表し、絶対格構文が無意図的行為を表す現象の説明には、「取りあげられるもの」としての絶対格と「叙述を展開するもの」としての斜格という考えは通用しないからである。

しかしここで指摘されねばならないのは、行為の意図性と無意図性が焦点という概念と無関係ではないということである。このことを次の例によって考えてみる。

- (10) a. 太郎は魚をさばこうとして手を切ってしまった。
- b. 太郎は顔を剃ろうとして顔を切ってしまった。

(10a)では、行為の対象である「手」が焦点となっている。そして「手」は、対比的に「魚ではなく」という意味が含意されている。一方(10b)では、「切る」という行為を表す部分が焦点となっているが、ここにもまた「剃る」という対比された意味が含意されている。あるいは、「切る」は「剃る」と対比的に用いられている。このように焦点は本質的に対比的意味を含意しがちであるのだが、この対比的意味こそ行為の無意図性を表す要因となる。すなわち(10a)に即して言う、「魚ではなく手を切った」ということは「意図していた魚ではなくて意図していない手を切った」ということであり、これはすなわち「意に反して手を切った」「誤って手を切った」という意味を表すことになる。(10b)でも同様に、「剃るのではなく切った」ということは「意に反して切った」「誤って切った」という意味を表すことになる。なお、(10a)のように行為の対象が対比の焦点を表す場合の無意図性は先の(5)のそれと同種のものであり、(10b)のように行為が対比の焦点を表す場合の無意図性は先の(4b)のそれと同種のものである。

無意図性が絶対格構文に特徴的であることについて、まだ十分な説明を与えていない。というのも、上の説明では行為または行為の対象が対比の焦点を表す場合と無意図性とのかわりを述べたにすぎないからである。能格構文でも行為者または行為が焦点となりうるし、それが対比的意味を表すこともありうる。したがって、対比の焦点が能格構文では無意図性と結びつきにくいことを明らかにしなければ、(4)や(5)の現象を万全に説明したことにはならない。

能格構文が行為の無意図性と結びつきにくい理由はふたつあるように思われる。ひとつの理由として、能格構文で焦点となるのが行為者または行為であること、特に行為者が焦点となりやすいという事実を挙げることができる。行為者と行為のうち行為の方は、それが対比の焦点となった場合、上の(10b)におけるように無意図性につながりやすい。しかし行為者の方は、対比の焦点となっても、そのことは無意図性とは無縁である。たとえば「次郎ではなく太郎が手を切ったのだ」という文において、「手を切った」ことの意図性・無意図性は行為者に対比的意味が含意されているかどうかに関係である。このように、行為者是对比の焦点となりえても行為の意図性にはかかわらないということが能格構文と無意図的行為とが分断されている理由のひとつである。

もうひとつ決定的な理由が考えられる。それは、能格構文が本質的に意図的行為と結びつくものであったということである。近藤(1996,1997,1998)で繰り返し述べ